



第120号

2014年6月1日発行

千葉大学教育学部
同窓会〒263-8522
千葉市稲毛区弥生町1-33

「同窓会報」百二十号発行に寄せて

千葉大学教育学部同窓会会長 山中 齊
(S35・3卒 市原市)

今回の「同窓会報」は、創刊以来第百二十号に当たるまさに記念すべき会報である。第一号から今日まで、会報の作成に携わってこられた歴代の関係各位に、心から感謝と敬意を表したい。

教育学部同窓会は、昭和二十二年四月に発足している。まだ千葉大学は存在していないが、先人たちは、戦後の教育の動向を見極め、当時の千葉師範男子部、同女子部をまとめ、狩野政一氏を会長に新しい組織を作り上げ、現在に続く同窓会をスタートさせたのである。

昭和二十四年、新制千葉大学の発足、学芸学部から教育学部への改組と、その激しい時代の流れの中にあつて、同窓会は主要事業の一つとして「同窓会報」の発行に取り組んだ。第一号の発行は昭和四十一年と記録されている。残念でならないことは、学制改革の嵐の中で、度重なる

事務局の変遷によることもあつてか、当時の貴重な記録が残されていないことである。会報はその後、年二回ないしは三回のペースで発行されてきた。

平成十七年十二月発行の百三号から、その内容・体裁を一新して、今日の百二十号に至っている。

言うまでもなく「同窓会報」は、同窓会と会員を結ぶ大動脈であり、会員同士をつなぐ絆である。

同窓会では、何よりも「同窓会報」の充実、そのための編集体制の確立、そして、一人でも多くの会員にお届けすることこそが使命であると考え、全力で取り組んできた。県内各支部を通じての配布に加え、直接購読の仕組みもその一環である。

百二十号の発行を契機に「同窓会報」の一層の充実、そして、願わくは全会員に会報が届けたい。最善の努力をして参りたい。



この度、同窓会の副会長をお引き受けした小宮山です。私は、一九七七年に教

育学部に入學し、中学校の保健体育の教員になることを目指していたが、三年生になったころ、大学院でさらに勉強・研究をしようと思つた。卒業後、筑波大学大学院で修士課程・博士課程を修了した。

その後、広島大学総合科学部の教員を経て、一九九三年千葉大学教育学部に赴任した。

現在、大学では、運動生理学、陸上競技、体育科教育法、小学校体育等の学部授業や大学院修士課程と博士課程の授業など、年間二十コマ弱（広島大学では十コマ以下だった）の授業を担当するとともに、身体運動の制御機構に関する研究をしている。

千葉大学着任以来、教員養成課程の学生数削減と新課程（いわゆるゼロ免課程）の設置問題、その後も入試改革、中学校教員養成課程の再編、大学院改革等々、いつも『改革』に奔走していたように思う。

現在も、文部科学省が主導する《ミッションの再定義》に絡んで、教職大学院設置、課程再編、学生数の適正化等の問題が山積している。これ

副会長就任に当たって ～教育学部の現状と課題～

千葉大学教育学部教授 小宮山伴与志

らの問題の解決に向けて多くの教職員が寝る間を惜しんで書類作成、大学本部や文部科学省との折衝に当たっている。

少子・超高齢化など、社会状況が急激に変化する中で、教育学部を取り巻く環境は厳しさを増している。学生数や教員数の大幅な削減、全ての学校種の教員免許を取得可能とし

ている構造を抜本的に変更させられることも十分に考えられる。このような困難を乗り越えるためには、外部的には、教員採用試験受験者数と教員採用率の向上、学内的には、研究の高度化と発信力の向上が目に見える形で提示できないければならない。

千葉大学教育学部は、これまで全国に優れた教員を多数輩出してきたが、現在は、途中で教員になることを諦め、一般企業に就職する学生もかなりいる。また、教育実習や教員採用試験後に「千葉大生は社会性が無い」、「本当に教員になりたいのか」等の厳しい声を聞く。これらを改善するために、ぜひ諸先輩の方々のご指導とご支援をお願いしたい。

副会長就任に当たり、学部の現状等を記しましたが、ご指導・ご鞭撻の程よろしく願います。

理科支援員等配置事業

に係わって



阿部 美 則

(S 42・3 卒
市原市)

千葉県教育委員会は、平成十八年に文部科学省の「先行事例」として、理科支援員等配置事業の試行を兵庫県、石川県とともに始めた。事務局が総合教育センター内に置かれ、私は、コーディネーターとして準備に取り組んだ。もう一人は中村悦朗さんである。

事業の一つは、小学校五・六年生に理科支援員を配置して、理科の授業の支援、後片付け及び理科室・準備室の整備である。もう一つは、特別授業の開催である。

試行の結果は、思わぬ反響を呼び、次年度からの本格実施に繋がった。試行県であるので、北海道、仙台市、静岡県、沖縄県、新潟大、富山大など、各地からの視察、問い合わせも多く、対応に追われた。

【理科支援員の配置】

試行時の支援員は、大学生に応募を絞り、派遣先は、両コーディネーターの出身地である市原市と市川市にお願いした。

学校現場では、授業と授業の間に実験の準備をするのは容易ではなく、終わってからの片付けもすぐにはできない。次時が運動場での体育となるとなおさら大変である。一人配置でも大きな支援となった。安全管理面でも教師が安心できる。配置校からは、「理科室・準備室がきれいになった」「授業への関心が高まってきている」等の声が寄せられた。

【特別授業の開催】

特別授業の開催のねらいは、学習指導要領の発展的な内容として行い、子供たちに理科学習、科学技術と社会生活との繋がりを実感させ、科学に対する興味・関心・意欲を喚起することである。

専門家の講師と小学校教員とのコラボレーションであるため、事前の打ち合わせを念入りに行った。授業で、社会との繋がりに触れると、子供たちは目を輝かせ、講師に対する尊敬の念も入り交じり、教室全体にみなぎる真剣さに得難い感動を覚えた。

講師たちも、子供に教える楽しさと子供たちからの感謝の手紙は、私の宝ですと口々に感想を漏らしていた。

夢は習志野原をかけ廻る



小笠原 達 夫

(S 40・3 卒
高校 山梨県)

アカシア、いやニセアカシアだったかもしれない。何本かのアカシアの木が生えている中に古びた木造の建物が点在する。そのアカシアの木漏れ日の中を目指す建物を探して行くのだが、どうしても辿りつけない。講義、あるいは試験の始まる時間は疾うに過ぎていく。絶望の中で目を覚ます。夢だと分かって安堵する。このアカシアの生えている絶望の迷路は、私が在学していた昭和三十六年～三十九年の西千葉キャンパスである。

私は、平成十五年三月、母校巨摩高校勤務を最後に定年退職した後、七年間教育相談員を務め、その後は一切の仕事を辞めた。現在は、十一年前からの菩提寺の護国寺の世話人をしている。日常的には、ウォーキングと句作と、至ってシンプルな生活をしている。

歩き回っていた。三年ほど前から

①片道四十分以内にある約五十カ所の神社仏閣に繰り返し立ち寄って、石碑などを見てメモる。②趣味の俳句の材料を探してメモる。③時には、国家や平和、人間についてなど、いやに哲学的なことを考えている自分に気づくことがある。一石何鳥かである。

俳句は、まだ日が浅く八年ほどである。地元の俳誌「白露」、今は「郭公」に投句している。感性を磨くことに主眼を置いている。自分では感覚的にいいなと思っている作品を四句。

蛙鳴く闇に礫の吸い込まれ
灯明の芯の音聞く夜長かな
般若面ぬつと現はる夕紅葉

蛍火の行き着く闇の深さかな

私は、習志野にあつた「無名寮」に三年間居座った。個性豊かな寮生との生活は、私の原点の一つとなつている。コンパと称しては、習志野原まで繰り出し、月を仰いで飲み歌った。旅に病んで夢は枯野をかけ廻る(芭蕉翁別吟)ではないが、私の最期の時は、茫々とした習志野原を彷徨する夢を見るのではないかと思っている。習志野も様変わりしたとは思いが。

特別寄稿



駆け出しの写真記者の頃

「チャンス逃さずに」

八木 正

(S45・3卒 浦安市)

昭和四十五年、日本は高度成長の絶頂期で、世間は大阪万博のお祭りムードに盛り上がっていた。

その春の三月三十一日、午前七時三十三分、よど号が赤軍派にハイジャックされ、世の中は騒然となっていた。そんな中、新聞社の東京本社写真部の辞令をもらい入社した。

地方に送る朝刊を刷った後、東京周辺に配る夕刊を刷るという特別体制で新聞を発行し、社内での熱気はすごいものがあった。

新人研修のさなかの四月八日の夕刻、大阪の天六でガス爆発事故があり、死者七十九名、重軽傷者四百九十名という大惨事が起こった。歴史に残るような大事件、大事故が続けて起こり、編集局の興奮が研修を受けている部屋まで伝わってきた。自分も早くこんな現場に出て取材したいと思った。

ところが、研修が終了すると九州の西部本社勤務を命じられた。西部本社では、来る日も来る日も九州のネタばかりで、全国的一面

に載ることはなかった。

そんな時、水俣病裁判の取材に行った。かの有名なユージン・ミス氏も取材に来ていた。結審の日、チッソの総務部長が会社には責任がないと法廷で発言し、延内は水俣病患者たちの怒号で埋まり、法廷から総務部長ともみ合うように患者や支援の人たちがなだれ出てきた。そのまま熊本地裁正門までもみ合って流れてゆく。各社とも、次の日の朝刊のトップに取材をする。私も夢中でシャッターを切った。

そんな中、総務部長と患者・支援者の間に入り、もみ合いを分けている男がいた。スミス氏である。両者ともみ合っているさなかには一枚のシャッターも切らなかった。そして、総務部長を取り囲んで患者たちが泣き崩れて冷静さを取り戻した時、スミス氏は初めて写真を撮り始めた。私は、このとき報道のあり方の原点を見た思いがした。スミス氏は、水俣の悲惨さを世に訴えたい、そこで生活する人

を描きたいというヒューマンに満ちた取材活動をしていたのである。自分とは姿勢が違ふと感じた。三年半ぐらいして博多の福岡総局に転勤となった。

石原慎太郎氏が環境庁長官になり、水俣に視察に来ることになった。一連の取材を命じられた。

彼が患者や支援の人たちが集まる所で深々と頭を下げて丁寧な挨拶をした。その写真を撮り、次の日の朝刊に「胎児性患者の前で深々と頭を下げ、挨拶する石原環境庁長官」というキャプションで掲載された。近年、この写真を使ってブログやツイッターで「石原氏が患者さんに土下座している写真です」などと発言している人がいるが、事実ではない。写真が勝手に一人歩きして、真実が伝わらないという恐ろしさを感じている。



昭和五十一年七月、後楽園球場の都市対抗野球の応援取材で東京本社写真部に出張した時、偶然に



載され、ようやく大取材に関わることができた。

そして、念願の東京本社写真部に異動し、逆噴射で有名な羽田沖日航機墜落事故、御巢鷹山日航機墜落事故、などしお事故など、大事故をへりから写真取材した。さらに、「世界の発火点」というシリーズで、中米のニカラグア、エルサルバドルの争乱地に出張するなどした。その一方で、オリエント急行同乗取材、ソウルアジア大会、バルセロナ五輪など、楽しい取材にも恵まれた。

歴史に残る事柄にでつくわすことはそうそうあるものではないが、誰にでも一生の内には必ず巡ってくるものだと感じている。そのチャンスを逃すことなく、捉える準備を日頃から備えておくことが成功の道だと思う。